

南方曼陀羅： 世界を体系化するある思惟の 図像的背景

三中信宏 みなか のぶひろ

独立行政法人農業環境技術研究所／東京大学大学院農学生命科学研究科(生物進化学・生物統計学)

世界に存在するありとあらゆるものの秩序を探り、その体系化を目指すのが体系学(systematics)である。多様な生きものを分類し続けてきた分類学という営為は、私たち人間にとって体系学的精神の発露だった。しかし、生きものを含めてもっとひろい自然や世界あるいは宇宙の構造を見通すこともまた、広い意味での体系学が目指す目標といえる。ここで重要なことは、包括的な体系なり大域的な構造が提示されるとき、それは文字テキストとして表現されるよりもはるかに多くの情報と含意が図像パラテキストとして描き出されてきたという点である¹。

本稿では、南方熊楠が彼の世界観を視覚化するために描いたいわゆる「南方曼陀羅」に焦点を絞り、その図像が示唆する思想史の背景と体系学史の系譜について考察する。この「南方曼陀羅」のもつ独自性についてはこれまで繰り返し強調されてきた。たとえば、中沢新一は、「かつて日本人によって考えだされた、もっともユニークで、もっとも深遠で、もっとも未来的な可能性を秘めた学問論、表現論、科学論が、ここにある。これを解読する努力の中から、きっと私たちの未来を開く、思想の鍵が取り出されてくるにちがいない」と書いている²。

南方熊楠の「南方曼陀羅」

南方熊楠(1867~1941)は、親交を結んだ土宜法龍に宛てた1903年(明治36年)7月18日付の書簡で、のちに「南方曼陀羅」と呼ばれることになるダイアグラムを初めて描いた(図1)。南方は次のように書いている：「さて妙なことは、この世間宇宙は、天は理なりといえるごとく(理はすじみち)、図のごとく(図は平面にしか画きえず。実は長、幅の外に、厚さもある立体のものとも見よ)、前後左右上下、いずれの方よりも事理が透徹して、この宇宙を成す。その数無尽なり。故にどこ一つとりても、それを敷衍追究するときは、いかなることをも見出だし、いかなることをもなしうるようになっておる。」³

複雑に絡み合ったネットワークとも解釈可能なこの図を、密教の「曼陀羅(曼荼羅)」と初めて見立てた鶴見和子はこう述べる：「曼陀羅とは、「宇宙の真実の姿を、自己の哲学に従って立体または平面によって表現したもの」である。真言曼陀羅とは、真言の教主である「大日如来を中心として、諸仏、菩薩、明王、天を図式的にしめたものである」。この真言曼陀羅にヒントをえて、南方は曼陀羅を森羅万象の相関関係を図で示したものと解した。」⁴

図1に示した「南方曼陀羅」は、現代風にいえば確かに高次元ネットワークと解釈するのがもっとも自然だろう。直線や曲線が交差するところには点が生じ、それらの点を足がかりにして相異なる方向へと展開していくこの模式的な網状図に

Minakata Mandala: An iconographical background of the world view of Kumagusu Minakata

Nobuhiro MINAKA

E-mail: minaka@affrc.go.jp

URL: <http://cse.niaes.affrc.go.jp/minaka/>

早田文蔵の「動的分類学」

東京帝国大学理学部教授だった早田文蔵(1874~1934)は、逝去する直前にドイツ植物学会会報に「植物ノ動的分類體系ニ就キテ(Über das “dynamische System” der Pflanzen)」というドイツ語論文を発表し⁶、「動的分類学(dynamische Taxonomie)」という新しい分類理論を提唱した。特定の形質を重視する「静的分類学(statische Taxonomie)」ではなく、複数の形質を同時に考察して総合的に分類体系を構築する動的分類学は、彼のライフワークだった。その中で彼は、華嚴経の宗教的啓示を受けて動的分類学に導かれたと明言している。

事物の間のかぎりない相互連関を説く華嚴経は、ごく自然に複雑なネットワーク的世界観を導く。この論文が発表される10年前、早田は台湾総督府の依頼を受け、当時日本領だった台湾の植物相を研究し、「ゲーテの『植物変容論』における「葉」の解釈：自然分類の原理の説明として(An interpretation of Goethe's *Blatt* in his “Metamorphose der Pflanzen”, as an explanation of the principle of natural classification)」ならびに「動的体系による植物の自然分類(The natural classification of plants according to the dynamic system)」と題する大部の論文を発表した⁷。そこに掲載されたカラー図版(図4)こそ、動的分類学を視覚化した図だった。曲線が複雑に絡み合うこのネットワーク図の点は、早田によれば遺伝子を表している。動的分類学の背後にあるのは、複雑な遺伝子ネットワークの発現により、多様な生物が出現するという早田の宗教的信念だった。

実際、早田の提唱する「動的分類学」は次のように描写されている：「ここで、それぞれの種や遺伝子を私がどのように理解しているかを示すためにこんなたとえ話をしてみよう。この宇宙はおびただしいガラス玉がつながってできる広大無辺なネットワーク[ein grenzenloses Netz]である。それぞれのガラス玉は色の異なる網の上であって、他のガラス玉の像を反射する。その結果、観察者が見る位置によって異なる模様が現れることにな



図4—早田文蔵の高次元ネットワーク

早田は、図中の色分けされた小球は遺伝子であり、それらが多次元時空間の中で関連しあってひとつのネットワークを形成していると説明した。出典：臺灣總督府民政部殖産局編：臺灣植物圖譜・臺灣植物誌料(第拾卷)(1921)figure 1

る。しかし、それは観察者の目には異なって見えるにすぎない。実際に存在するのはすべて同じ無色のガラス玉だからである」⁶。

早田がイメージしたこのネットワークは、華嚴経の「インドラの網」を連想させる。インドラすなわち帝釈天の宮殿には巨大な網がかかっている、その結び目にはことごとく水晶の宝珠が縫い込まれているという。全宇宙を覆うこのインドラの網の宝珠が互いに反射しあっているさまは、宮沢賢治の童話「インドラの網」では次のように描き出されている：「ごらん、そら、インドラの網を。」私は空を見ました。いまはすっかり青ぞらに変わったその天頂から四方の青白い天末までいちめんはられたインドラのスペクトル製の網、その繊維は蜘蛛のより細く、その組織は菌糸より緻密に、透明清澄で黄金でまた青く幾億互に交錯し光って震えて燃えました」⁸

ネットワーク視覚化としての曼荼羅

南方熊楠の「南方曼陀羅」と早田文蔵の「動的分類学」にはいくつも共通点がある。その共通点のなかでももっとも特筆すべきは、生きものを含

む万物の多様性を体系化するための基礎として、いずれも密教のマンダラ的世界図像に基づく可視化を試みたという点である。ギリシャ時代以来の長い伝統をもつ「存在の連鎖」に代表される直線的なチェーン構造、あるいはダーウィンやヘッケルが描いた「系統樹」のようなツリー構造に比べて、網状のネットワーク構造ははるかに複雑であり、その解説は困難を極めることもある。しかし、高次元ネットワークはそれ自体は密教的でも秘教的でもなく、事物の体系の視覚化するツールのひとつにすぎない。記号学者ウンベルト・エーコは、百科事典的な知識の体系化には「迷宮(labirinto)」たる多次元ネットワークが必須であると主張する^{9,10}。南方や早田が造り上げた“迷宮”をたどるアリアドネの糸を、私たちは手にしている。

文献

- 1—三中信宏・杉山久仁彦: 系統樹曼荼羅: チェイン・ツリー・ネットワーク, NTT 出版(2012)pp. 68~77
- 2—南方熊楠(中沢新一編): 南方マンダラ, 河出書房新社(1991) pp. 9~47
- 3—南方熊楠(中沢新一編)上掲書 pp. 255~330
- 4—鶴見和子: 南方熊楠—地球志向の比較学, 講談社(1981)pp. 81~88
- 5—南方熊楠(中沢新一編)上掲書 pp. 145~176
- 6—B. Hayata: Berichte der Deutschen Botanischen Gesellschaft, **49**, 328(1931)
- 7—B. Hayata: 臺灣植物圖譜・臺灣植物誌料(第拾卷), 臺灣總督府民政部殖産局編(1921)pp. 75~234
- 8—宮沢賢治: インドラの網, 角川書店(1996), 青空文庫 http://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/460_42328.html
- 9—ウンベルト・エーコ: 弱い思考, ジャンニ・ヴァッティモ, ピエル・アルド・ロヴァッティ編(上村忠男・他訳)法政大学出版局(2012)pp. 77~115
- 10—U. Eco: Dall'albero al labirinto: Studi storici sul segno e l'interpretazione, Bompiani(2007)pp. 13~105